

釋尊の說法

宇井伯壽

一

經と稱せられて居るものは凡て佛陀の説いたものとなすのは極めて一般的事であつて、實際としては決して當を得たものではないから、既に古くから經には佛説と弟子説と仙人説と諸天説と化人説との別があるとせられて居る。勿論これ等五人説經も凡てこれ佛説たるに外ならぬとなす解釋もあり得るが、然し信仰と教理上の解釋とを離れて觀察すると、歴史上の釋尊佛陀の説法がどれだけ其ま現今まで傳はつて居るかは頗る疑問である。

佛陀が四十五年間なした説法の行はれた場合を見るに、第一には公開堂の如きに於て多種多様の人人の集りに對してなしたもの、第二には特殊の數人の會合に對してなしたもの、第三には一般の弟子に對してなしたもの、第四には個人に對して一般的になしたもの、第五には特殊の個人の非行についてなしたもの、其他佛陀が自ら感興の言を述べた等種々なる場合もあるであらうが、又之を内容的に見れば、豫めかくかくのことを説かむと其趣意を意圖してなした説法、必ずしも豫想することなく偶然のことから説き始めて一般的に教をなした説法、個人の請問によつて答へつつなした説

法等多種であらう。何れの場合に於てもまた何れの説教にしても、佛陀自身は何等の手控又は講演原稿の如きものを作つたことはなかつたし、聽者に於ても説法を記録し又は其要領を書留める如きことをなしたことがない。然らば佛陀の説法が如何にして傳はることになるか。これ等何れの説法でも、ともかく説法が其説法の後まで残るとしては、佛陀でいへば其腦裡に其説法の趣意要領が憶持せられて居ると、また聽者でいへば其聽者が其説法の趣意要領を把握して各腦裡に憶持して居るとの二の場合のみで、此外には何等残る所あるものではない。而も此中で、佛陀の憶持は、之を傳はる方面からいへば、其後度々説法として發表せられて聽者の憶持となるべきものであつて、入滅後に於ては殊に聽者の憶持以外には残る所はない。故に佛陀の説法は、それが如何なる場合のもの又如何なる性質のものであつたにしても、凡て聽者が趣意要領を取つて憶持したものから何等かの方法で傳はるに至つた外には方法も筋道もなかつたのである。聽者が要領を憶持したことが佛説の傳はる唯一の方法であつたことは最も注意すべきことである。

説法の趣意要領を把握することは聽者の一般的の素質性向の相違並に其場合の注意緊張の相違によつて、各人に決して同一様であることは出来ぬ。勿論大綱については何れの人も互に異なる所なく理解し憶持し得るであらうが、末節細目に關しては各人各様であるのが人類一般の性質上當然である。故に後残り傳はるものとしては趣意要領としても大綱に屬するもののみであるが、然し末節細目については聽者各は機會を得ては互に語合ふことも多く、従つて彼此相補うて或程度までは一致せしめたであらうと考へらる。僧伽内に生活する比丘の間にはかかる談合は日常事の一であつたに相違ない。然らば末節細目の或ものもまた人人に憶持せられて後に傳はることになる。殊に特殊の數人の會合や個人に

對し一般的になし又は特殊の個人の非行に關してなした説法は之に關係なき人人には其趣意要領の大綱すら知らるるものでないことも多いに拘らずこれが傳はるに至つたのは確に日常僧伽内の人人が談合をなしたが爲なることを證して居る。故に大綱と末節細目を凡て趣意要領の中に含ましめていへば、此の如き趣意要領が佛弟子の間に語合はされて各人の中に傳はつたのである。更に之を次の時代に傳はる場合として考察すれば佛弟子は各自らの弟子信者に對して自ら憶持せるこれ等の趣意要領に基いて之を敷演し解釋しつつ説き教へたのであつて、之によつて種々なる場合に種々なる人に佛陀の教なるものが傳はるに至つたのである。敷演解釋は佛弟子のなしたものではあるが、大體は佛陀の説いた所を憶想してなしたに相違ない。然し佛弟子と雖決して常に機械的にのみなしたのではないから、佛弟子自身の考によつて活用的になされたことも少くないと考へらるるが、決して中心たる佛説趣意要領の意味する所を逸脱することはない。従つて佛弟子は活用的に敷演解釋をなせばなすだけ自らの弟子、即ち佛陀の孫弟子たるもの、に對して自ら憶持せる佛説の趣意要領を暗誦憶持せしめるに至るのである。佛説の趣意要領だに憶持し得ば、敷演解釋は之をなす人の技能に應じて活用せられ得るし又如何に活用するとも、佛陀の教たるを失ふことはない。更に又孫弟子が自らの弟子、即ち佛陀の曾孫弟子、に對して教導する場合に於ても、孫弟子が自らの師、即ち佛弟子、から傳へた佛説の趣意要領に基いてなし其佛説の趣意要領を暗誦憶持せしめ又それによつて各人相應に活用せしむることになる。かかる點は玄孫弟子並に其後の佛教徒の間に於ても全く同様であつて、かくして佛陀の教が横に或時代の多數の人人に、また縦に次次の時代の佛教徒に弘通傳播し傳承維持せらるるに至つたのである。

佛陀の孫弟子、之を一般に師孫といひ師孫から佛陀を師祖といひ得る人人の時代には一般的にいへば師祖は既に入滅した後であるから、佛陀の教としては今いふ佛説の趣意要領が中心根本となつて居るのであつて、外には之に對する敷衍解釋がある理であるが、この方は、いはば、伸縮自在のものであり趣意要領に基いて初めて存するに過ぎないものである。故に前代から傳はる佛説の趣意要領が佛陀の教、即ち佛教の全體であると認むることを得るのである。此こそは師孫以後の各時代から見ても全く同様であつて、憶持傳承せられた佛説の趣意要領以外には佛教を代表し得るものはない。此の如く佛説の趣意要領は重要視せらるるものであつて、而もこれは佛陀の說法から起り佛陀の說法の語を傳へたものと見る外はないから、之を通常佛語と稱するのである。佛語といへばとて、決して佛陀の用ひた言語が音聲として傳はつて居るのでないことはいふまでもなく又佛陀の言語が佛陀によつて縮寫せられたものでもなく、全く佛陀の說法の聽者が說法の趣意要領として纏めたものに外ならぬのである。

二

右にいうた佛語は代代相傳はるには人人の口によつたのであるが、然らば其人人の言語はなんであつたかの問題が起る。印度は古來言語が極めて複雑である爲にこれを考察する要が存するのであるが、先づ佛陀自身の用ひた言語がなんであつたかの點から考へて見ねばならぬ。實際としては現今の研究状態では佛陀の用ひた言語が何であつたかは明確ではないとなすほかはない。佛陀の下には種々なる階級種々なる地方からの人人が集まつたのであるからこれ等の人人の

言語は雑多であつたに相違なく、これ等に對して說法する佛陀も亦種々なる言語を用ひたであらうと想像せらるる。佛陀の故郷迦毘羅衛城の言語が如何なるものであつたか全く不明であるが、佛陀は之を母語として此外に種々なる言語に通じて居たに相違ない。記録せられて居る傳説の一から見れば、比丘等の間には純粹な梵語を用ひて居たものもあつたことが知らるるから佛陀も亦これ等を知つて居たのである。然るにかかる雑多の言語を用ひて居た比丘信者の大衆を會合せしめて公會堂の如きに於て一般に說法をなす如き場合には佛陀は何れの言語を用ひたのであらうか。學者の研究によれば、佛陀の時代には印度は經濟狀態も良好で交通も各地に頻繁に行はれたから、自然の必要上各地方の方言が互に混合し遂に當時の經濟交通の中心地たる摩揭陀國の言語が中心となり之に各方言の特長が化合し其爲に殆ど各地方の人に通じて理解せられ又實用せられ得る如き一種の通用語が成立して居つて、之を摩揭陀語と稱して居たのであらうといふ。佛陀は恐らく多人數を一堂に於て教ふる如き場合にはこの摩揭陀語を用ひたのであらうが、然し摩揭陀語其ものは現今としては明瞭には判らないから、これ推定上のことのみである。パーリ語を以て佛教の典籍を傳へて居る系統ではパーリ語が即ち摩揭陀語であり摩揭陀語が佛陀の用ひた言語であるというて居るから、これ等に基いて推定をなすに至つたのである。摩揭陀語其ものの起原並に通用語としての性質は學者の考究する如くであらうが、然しこの摩揭陀語が其まゝパーリ語であるのではない。何となれば、摩揭陀語の言語學的特長として知られて居る特質が現今のパーリ語内で既に言語學的に變化があつたと見ねばならぬが爲である。パーリ語内の變化は實際上之を指摘し得る所であつて、少くとも第一、ガートハーの言語、此中には古い形を有し又パーリ語特有の形をも有する。第二、經律中の古い散文の言語、前

者よりも純粹て又發達したもの、第三、藏外の新しい經の散文の言語、特に古い註釋書に用ひられたもの、第四、後世の技巧に成る詩歌の言語、人工的に新古の言語を混用したもの、の四階段が看取せらるるとは専門學者の説である。此中ても第一と第二との發達上の隔りは第二と第三との隔りよりも遙に多いといはるるから、現今の經律中の散文のパーリ語は原始的のものよりも頗る後世のものである理である。而も第一階段に於てすら摩揭陀語の特長が表はれて居ない程であるから、パーリ語が其まま摩揭陀語であるとなす傳説は殆ど何等の根據もないものである。故に佛陀が公に用ひたと考へらるる言語は現今には傳はつて居ないのである。従つて佛弟子が公に用ひた言語も何等傳はつて居ない。然したとひパーリ語が其まま摩揭陀語を代表するものではないにしてもともかくパーリ語は即ち摩揭陀語なりとなす傳説の存することは注意すべきで、恐らくこれパーリ語の起原が摩揭語に關係深かつたか又はパーリ語と摩揭陀語とは性質上類似して居たか或は摩揭陀語は遂にパーリ語の中に消入したか、何れかなるを示すものであつて摩揭陀語で述べられたことが恐らく甚大な變化を受けずにパーリ語に傳はつたことを表はして居る傳説であらうといへるであらう。ともかく摩揭陀語とパーリ語の古いものとの間に相當に密接な關係あることは之を認むべきであらう。それにも拘らず、摩揭陀語とパーリ語とは全同であるのではないから、摩揭語で言證はされて居たものがパーリ語で言證はさるることになれば、明にこれ翻譯であることを注意すべきである。

以上のことを前述の佛語に關係せしめて見ると、佛語は佛陀が纏めたものではないから、佛語が摩揭語で證はされたとはいへない如くであるが、實際はさうではない。公の場合に摩揭陀語が用ひられたのであるから、公の場合の説法の趣

意要領も、佛弟子によりて、摩揭陀語で縮寫せられたに相違ない。加之、摩揭陀語が公の場合に用ひられ又其趣意要領も摩揭陀語で語合はさるとすれば、摩揭陀語が自然に、いはば、聖語として權威あり神聖なるものと認めらるるに至るから、必然的に又他の場合の種々なる說法も其趣意要領を摩揭陀語で纏めることになり、これが佛弟子相互間のみならず師孫に對してもこれが傳へらるることになり、曾孫玄孫の弟子等も亦摩揭陀語のものを重むるが爲に、摩揭陀語は遂に僧伽の標準語として神聖になり權威あるものになる。これが又何時からパーリ語で言證はさるることになりパーリ語が摩揭陀語に代るに至つたから、パーリ語が神聖視せられ權威までも附せられ來つたのである。然し此間には前述の如く一種の翻譯が行はれた理であるから、毫末の變化もなく傳承維持せむとする希望とは必ずしも一致しないことも起つたのである。然るに更に考へると、前述の如く佛陀の下には梵語を用ふる比丘や他の種種なる俗語を用ふる比丘や雜多の種類のもがあつたのであるから、これ等の人人はたとひ佛陀が摩揭陀語でなした說法を聞いたにしても、自分等が趣意要領を把握する際には自分等の用ふるそれぞれの言證はしたことも事實行はれたに相違ない。更にそれ等の人人が自分と同一言語を用ふるものとの談合には其言語を以てし、又自分等の弟子に對しては同じく其言語で暗誦憶持せしむるから、僧伽全體としては摩揭陀語で言證はさるものが權威あり神聖なものとせられたにしても、それと共に他の種々な言語で言證はされた趣意要領も行はれて居たに相違ない。これ等は各後代までも存したのである。故に佛教に於ては古くから既にパーリ語のみが唯一の言語としてパーリ語のみが行はれて居たのではない。代代の佛弟子たる佛教徒が印度の實社會に於て人々に接觸し教導する際パーリ語のみを唯一の言語として用ひて居たとはい底想像することすら

不可能である。教化せらるるものが各異つた言語を用ひて居たのであるから、教化する者はそれに應じてそれぞれの言語を用ひたのであり、パーリ語のみである如きことはあり得ることでない。殊に後世佛教内に分派が起り各部派で佛教を傳へた時代には部派によつて言語を異にしたといはれて居るから、僧伽内の言語は古くから多様であつたのである。パーリ語は一種の翻譯を経たものといふべきであること前述の如くであるが、他の言語で言詮はされた佛語は其最初から其言語で趣意要領が取られたとすれば、其言語には却つて翻譯の如き變化はなかつた理であるし、たとひそれが僧伽内の神聖な標準語でなかつたとしても、却つてパーリ語で言詮はしたものに劣らない價値を有して居たことにもなる。此の如く考へるのは、漢譯せられた阿含經等の古い經律の原語はパーリ語ではなかつたが其古さに於て又其價値に於て其他に於て決してパーリ語のものに劣つて居ない點を明にせねばならぬ必要上種々に考察した結果によるのである。

三

前に趣意要領は之を細にいへば説法の大綱とそれの敷演解釋とであるとなし、又此二を含めて趣意要領となして置くことをいうたが、何れにしても趣意要領を具體的にいへば何を指すかを明にすべきであらう。それは實際としては阿含經に存して説法要領を示して居る古い偈と一般の古い法數名目とそれを述べて居る型となつた古い散文などを指すのであるが、第一は諸法因緣生是法說因緣是法因緣盡大師如是言や諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂やの如きもの、第二は四諦十二因緣や三十七道品の名目の如きもの、第三は四諦十二因緣を述べて居る型の散文の如きものである。これ

等の古きものが實に佛語であり佛陀の教を代表するものである。これ等がどうして成立するに至つたかを考察するに諸法因縁生云々の偈は五比丘の一人馬勝が王舎城に於て舍利弗に佛陀の説の如何なるものなるかを問はれた時答へたものであつて、舍利弗は之を聞いて直に法眼を得、同行者目犍連と相伴うて佛陀の許に到つて弟子となつたといはるるものである。王舎城に佛陀の來たのは此時が成道後最初であつて、成道後鹿野苑で五比丘に對し初轉法輪をなし爾來暫く留まつて最初の雨安居をなし、其後そこを去つて三迦葉を度して弟子となしてから王舎城に來たのであつて、馬勝は初轉法輪以後此時までに教へられた佛説の趣意要領を此偈に纏むるに至つたのであると考へらるるものである。又四諦の如きは通常初轉法輪で説かれたといはれて居るものであるが、初轉法輪は實際は最初は八聖道を説いたのであり其後四諦を説いたのである。八聖道の説法としては八聖道の名目のみが述べられたとなつて居るが、實際の場合としては此の如き事もあり得るとではない。五比丘はそれ以前には苦行主義を奉じ苦行を以て唯一絶對の解脱方法として居た人々である。佛陀は此五比丘に對して苦行と五欲に耽るとの二は極端な避くべき行であると説き、如來は中道によつて悟つたが中道は八聖道で八聖道は正見正思正語正業正命正精進正念正定であると説いたとせらるるも、此説のみで五比丘が佛陀の眞意を理解すると等あるべき理なく、之によつて悟るが如きとは想像だも出來ない。佛陀は先づ八聖道の最初の一だけを反覆丁寧に詳説し例を引き喩を擧げ迂餘曲折を経て説いて漸く大體を解せしむるに至つたのであらう。傳説によるも最初に一人が悟り次に二人が悟り、此場合には三人が行乞に出て食を得來りて他二人に食はしめ、其二人は其間佛陀の説法を受けつつあつたとせらるる程であるから、此間佛陀は反覆自己の説を説いて解せしむるに努めたのである。かく

して漸く五比丘が理解し得たから更に四諦を説いたが、これも幾度も幾度も繰返して説き教へたに相違ない。決して名目の羅列のみで五比丘が理解し悟つたのではないことは馬勝が舍利弗に問はれた時にも馬勝は自信を以て佛陀の説を理解して居るを表はす如き態度を取らなかつたといはるゝ、點からも推知せられ得る。然らば八聖道にしても四諦にしても單なる名目は其詳細極まる説法の趣意要領而もその大綱を示して居るに過ぎないものなることは炳焉たるものである。かかる法數名目が、かかる次第によつて生じたものであることは他のものに於ても明瞭に見らるる所であつて、かの戒定慧の三學の如き其著しいものである。戒定慧の三學は決して其最初から此三を定めて置いて説いたのではなくして、パーリ長部漢譯長阿含の沙門果經に於て、人が十號具足の佛陀の出世して圓滿なる法を説きつゝあるを聞き以て佛陀の許に行きて出家し、身心に關する淨行禁戒を守り心の寂靜を修し遂に其智が完成して解脱し、解脱したとの自覺を得て沙門果の完成するを詳細に説いたものを、後にある遊行經即ち大般涅槃に於て纏めて、此の如きが戒なり此の如きが定なり此の如きが慧なり、戒によつて定が生じ戒定によりて慧が明かとなるとの意味を述べたのが即ち戒定慧三學といはるるに至つたものなることを示して居ることが明に見らるる。同時に此三學となつたものが他方に於て戒定慧解脱の四法並に戒定慧解脱知見の五分法身とせらるゝに至つたのであつて、長い詳説の説法が項目化せられて法數名目となる経過がよく表はされて居る。五分法身は後世に於ても重要視せらるゝがこれは重要視せらるゝのが當然で、五分法身になるものものが實際的に修行せらるれば沙門果たる佛教修行の目的が達成せらるゝのであり、而も達成せらるゝならばそこに佛陀の教が眞に生きて居ることを表はすものであるからである。法數名目其まゝでは乾燥無味でもあらうが、

かくなるもとの詳細な説法は決して乾燥無味なものではなくして、全く生きた血あり肉ある説教たるものである。此の如く考察すれば法數名目が即ち佛陀の説法の趣意要領として發生したもなることは明である。更に四諦十二因縁などの述べられて居る簡潔な散文は何れにあつても同一の型をなし文章も言詞も常に全く同一であるが、佛陀の實際上の説法がかかる型によつて一定した言文で行はれたとは考へられないから、これ明に詳細な説法の趣意要領を纏めたものに外ならぬと考へらるる。之を要するに佛説の趣意要領は具體的には如何なるものであるかといへば以上に述べた如き三種のものによりて其一斑を示し得るのである。

四

此の如き佛説の趣意要領が佛語でありこれが而も佛教の全體であつたのであるから、所謂經となつて現はるゝにもこれ等に基いて經の形となつたもの以外にはない理である。これ等の趣意要領が形を得るに種々なる方法があつたから種々なる形の經となつたに外ならぬ。前にいうた如くこれ等の趣意要領は佛弟子師孫其後の佛教者によつて活用せられ敷演解釋せられたのであるが、勿論趣意要領なる佛語を中心となす以上は自然に先づこれ等佛語の實際上起り又は行はれたことを明にする要が存するから、こゝに於て佛陀が或時何處にありて比丘と共に何人かの爲にかくかくのことを説いたが其説いたとによつて説かれた對者並に座にある比丘が讚嘆し信受し又之に従つて實際に行うたといふ如き叙述の形が起つて、此間に佛語が挿入せらるゝに至るのである。これが即ち極めて一般的な經の叙述の形であるが、經は凡て實

際としては結集を経て傳はつたとせらるるから、其最初に如是我聞が加へらるるのである。然し佛説の趣意要領たる佛語は種々の場合に於て起り決して一樣ではないから、經の叙述の形もそれに應じて多少異なる形ともなり又佛弟子の説いた説法の趣意要領であるとすれば、その起つた場合を叙述の形の中に入れるから、經の叙述も異つたものとなり、其他種々なる場合のものとせらるゝに至るのである。かの五人説經といはるゝものは通常は大乗の經典についていはるゝのであるが、阿含經を見ても亦かく五人説經といへる如くになつて居るから、それ等は凡て今いふ如く種々それゝの場合を經の叙述の形となして起つたものたるのである。そして此間には佛弟子師孫等の敷演解釋を主となして經の形としたものもあり、佛陀自身の感興の言が其まゝ經の形に表はされむとしたものもあり、又は弟子相互間の說法談論を表はさむとするもありて五人説經といはるゝ如き種類が存することになつたのである。

以上の如きが現今阿含經として傳はる經の起る經過の大要であると考へらるゝのであるが、これ等が其まゝ現形の阿含經であるといふのではない。現形の阿含經はこれ等の經過によつて成つた經が更に變遷した後のものであるといはねばならぬ状態にある。故に現今に於て佛陀の說法を何處に如何に求むべきかは頗る研究考察を要することで、決して簡単に經の中に求むればよいなどといふを得るものではない。阿含經は一般にいへば極めて簡潔素朴なものであつて數々いふ佛説の趣意要領に首尾を附したに過ぎないが如きものであり、長部長阿含などの諸經の如く多少詳しく説き從つて長い經もあるにはあるが、これ等の内容中には敷演解釋も多く含まれて居るのであつて、決して佛陀が丁寧反覆に述べた言が其ままに傳へられて居るのではない。従つて法數名目其他型となつた古い散文の意味を明瞭ならしむるが如き

ものは阿含經中にはほとんど發見せられない程である。長い經中の敷演解釋が如何にもこれらの意味を明にして居るのであらうと思はれようが、然し實際としては決してさうでなく、他の方面の敷演解釋たるに過ぎない如きものである。現代の學者が古い佛教を研究し其結果種々なる法數名目の意味を明瞭に述べて居る如き場合を見出すことがあるが、これ等とて概していへば阿含經中に何等切確な根據を有するものではなく、唯研究を進めて行く中に自然に考付かれた解釋たるに過ぎないものである。かゝる點ではむしろ論藏家の取つた解釋並に支那に於て古くから試みられて居る解釋に依頼する方が安全である。これ前にいへる如く趣意要領たる佛語は師孫等にありては前代から傳承せる解釋が行はれて居たのであつて、之を熟知し之に通じて而して佛語を活用するを得つつあつたのであるが、これが遂に阿含經には傳はらずして却つて其幾分かは論藏家に傳はり多分は恐らく失はるに至つたのであらうと想像せらるゝのである。ともかく阿含經に傳はつて居るものは多くは實際に行ふ說教化導の標準根據となるもののみであつて、例していへば書籍に存する目次の如きものであり、實際の說教化導は書籍中の各節の如きものであつたのである。

以上は主として佛陀の說法が如何にして傳はり、そして又如何にして阿含經となるに至つたかの經過を考察したのである。大乘經典と稱せらるゝものが如何にして現はるゝに至るかはいふまでもなく自ら又別個の研究問題である。

(九・十・二六)